



百人一首詠抄大成卷三

元禄六年近七百余年余

伊勢祭主

後撰者梨庵五人之一

太中臣能宣

天兒屋根命

さへ代正六位上輔道の孫祚祚人副

古物云天兒屋根命

十八世孫常磐大連

祭主賴基子也

太中臣姓ハト部説云天兒屋根命

父と云人中臣役を欽明天皇へ授けられて始て中臣の姓を賜ぬ大職

冠ノ時苏原の姓とちう大職冠

鎌足三男國子大連の子意義

唐亦中臣となりて神僕景

雲三年に意義唐乃子清唐

中納言に叙して始て太中臣と

名う云々を承譲よハ圓す大連ハ可多

能祐大連の子

はねゆき

坂撰集著云少後波大連



云系譜女ハ神祇大副云松父抄云正暦三十八年九月三
八雲信持みと元輔絶宣不梨壹の中に可然哥之と有

御花集立上そ、うへ去きとどりとハ内御内裏の出垣をま
どうとの愚案林中門をもとあ門をとばか清され若山垣
わりととづり士生忠峯始近傍の妻女ありとほ母来門の府
せよきに幸と今のかく女からむよりの仰きうち成被つた
秋のあらかじめさじきもてみをみどりの赤白地のこなり
と後り湯士はげお門府乃下に表の裏よ無をそく假人すり
从ふ序方こ板ひやく達みどりあひりひねをくわすりをも
ゆとたゞくはゆくみすくをすて登はまひんめをけみて
えひきすくみだらきくこ祇云來といひ音どひがのすり
よきねばくせひてえゆう(よきり) 中勢奈みよよもく湯士
のあゝ火よわねともわきすく内よこてよき

七百年余

三一

藤原義孝号後少将兄舉賢

前少將故也

内抄云謙德公三男母中勢代明親王女右少將從五位下

春宮亮云栄花物語花山

卷云ほのかわあさくちんへ
やくろぶかひて法花
経とくくとくとくとくとく
アテ法経とやうりなま



一とのとおかまくらく云作志教云天延二年九月十六日
卒云云教をふ事妻袋中子亡者教云義孝サガ
矣一物をつくり川邊にかへてしやは乞ハ死去す
かくとくかせとといひきばえれられられ妹女の妻女
きよかのゆきよ母美え云兩とくふ様のたぐらうえよ
きよかのゆきよ母美え云兩とくふ様のたぐらうえよ

首葬蓮葉宮裏月今磨松樂

甲中風是賀縁阿闍梨夢舟ら之云代ば於大後委
枝於きを二そんそなりとちりありて次は一そう云云法抄云はれ志
すなつへ一作延奇ふらねて一交のあそをみハのう論も行けり寸
引と毎てのちうよりよれひさくあひみよりさんじて
やくめりのどりそろ食えなくもこれとあひいはる事ととの
心はお云をひきふといづ云望よんをあり人をもすんの切う
きよわんのいづくもかこぢりはる事ととあるとくにほ
ふきとそびれとからむことを云お古えけよそあみくま
とぞひりくは念代ありするが廉義云ひ奇心あひひり

音九牛年

藤原実方 鴨携本社は人之流俗まよひ
侍従守殿子の母を大臣源雅信公女右中將孟世下陸奥守長徳四等
士郎於征國卒云於數回之藤原系囂云七保元年正月廿六日於
任國陸奥卒之由國三月到末云太袖中抄さる中將ハ陸奥八十七

三三二

藤原実方別名

かくじ
えや
りづきの
さ
かくじ
りゆう
りゆう



のうれんひよみ中ねよそ
れこ仍テニ度奥中將に因
乃弓金音將軍ク合戦お來テ
室中赤て水鉢云云傳抄云
け実方行成と同時く居上
人そく也じ差上そく論
をまくい處の翁と號にて
お處れどもねほく村
空乞神をあくせてをまうこかはどてもハいきうく
丸冠トあひゆんとすれ共實方のをうくとちをきてと
れうと上山も申とひそた所後をれて實方とハ吉松乃とまつれ
と度奥守よりて次は子代てほのよそくとされ
てゆみてうせしとくと後世傳云實方中將の法墓云くの
おくとてはうきと使く丈持城とやる人のねよそりたぬ

ハテ陸奥守よ成かひて匿れめりハ世をも廢すつゝの
基盤すゝらどハ舊のわたりてくありきとて仰がり實お
乃中わのなよ成きはやがひひのうそはとやとヤホ滅ぶ
也ハ云えはれよはれよもよの世の世人をはらひ云えぬ流云
実方笠原のち祖神の翁を下るきとせりきうちされ
休あそるもれて実方卒を云今か実方の廟モ社
ノムヤラニアリ云云 新古今兵傷於よみらのつて廣
き殿中ニ実の坂とてありきりよ居るとかひらをちく
くらひもとおこゑらばとめ事く核のすきらむとて
スルビ西法に吹き傳ふやうり雲たくほ於墨外ハ之傳
ウチニヨリテウタスムハりそくお云或人云鶴山仲
介のくみれもすくさうきく付よみある寝言にて
寺まれあやましくそれと云其田庄の官云ば函又ハレ
ちうをまくハルカと云事とくと云ふとを申ねの北級乃

お附りハあやべ物減ひてかとゆりられくじゅよハあや先
をきくとヤはりなりて付きハあさみ宿乃れうミと云物
らはいきどかすとゆけちりくさきをてねぐとぞひまきゆ
の北級云ハ実方の事云々 童蒙翁曰

ほ於送森一女より先てひづけまう云かとすてえや
いきとはあ事ハさとをふてかおととくもえやハよど
ねどくめうち三毛院法経えやをうと切くえもいひる
たとくぢりとみちいさきあくみぢうし自能みうらで六
秋をよむくにゆくはまハ差嵩袖中あたたきヨシ手袋蓮くさ
え云ああ同き一もまハ差嵩袖中あたたきヨシ手袋蓮くさ
とよしよくいんこめえまくちもすとときてとくまくは矣
治よ取り物れハものもひと穴よりく後づくさくも
あまるやひをもえいひやぬハマ一もいだとうあんじんとく

かうひの切き心のあざさきといひのへらすと神中あふが
能云は候次ひはあはれ近ひのまうひるみかわすト所の
候ひのこ徳因伸を養ふあらと考六帖云あちまうじ
のよりきもすと云うよつて諒能とほりのまくら
う双流よえよことやトせよくろといひもくよおりひた
うらやめをよよかされ候ひのまくらつもくと云ふ墨
毛ホ一派授りとづくめハ走吉有ホの内役近にとせん
うハも流用し使候

六百十余年

藤原道信だいしん也出ね云九条くじょう太お義ぎ相あい師し惣そう公こう孫そん恒こう徳とく公こう麿まろ
四男也母謙德けんとく公女左中將從四佐上正曆五年卒サニ云キ栗田
閔白透兼みんぱくの養子とすよう一榮花物薄さくはシテね景けい毛も
あり大後だいご云持中もちなかの伝でん老おみしき和わすの土どよそんにいた
人ひとよくそむかひをくわきびぬくりうに云い

三四

藤原道信だいしん也

うめき行うめきぎょう

ちりみちりみ

うめき行うめきぎょう

あまうぎあまうぎ

けられ

ゆめとをひひゆとよ

小判こばんもあらうあらこのりうれの切るるよくみぬれはく
向むかりむかすれまうんあくられかく面おもてかく面おもてかく面おもてかく
タ血たけもよあやまうけさのやどひれすれすれそもあらつ
うといづかがくくく

七百年前

右近大将道信母め心こころ道信母め中納言長良ながら公こう三代法立佐下

惟岳孫左衛門佐倫寧女也

母山城守恒基女也東三条

入道兼家公号法船院持政之

室本朝官今義人三人内へ

大鏡云テ云婆奥ち傍籠

乃ねのじとめ假てお

はぢへく邊猿どらごく

く大物をすくすそを夜

ねをだぬりきは母とひやかうの上よより

それには聲

塞ひ邊ひのひもがのうのうきこ聲よあひて

鷲嶺自紀と名つて

せよひろ先きり

於西高入後改義素

國りうきみ門とおぐあきくきひを化

りすくねをひくにほりされうてめきくみ

おわほくまへくわ

えきおもよすら漏へおんくうききはくとハ

あくらめくのまのまくほのくすく

せよひろ先きり

儀同三司母 前掌侍貴子

作考アレ

高内侍臣於さゆれ云高階

茱忠後妻高五也中御白

道隆公室儀同三司伊周

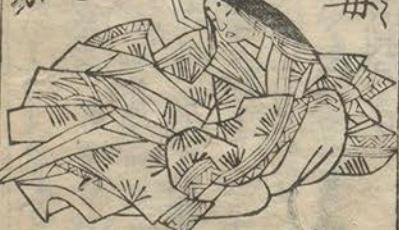
公中宮定子ホク母也

大鏡云高内侍事それ

儀同三司母

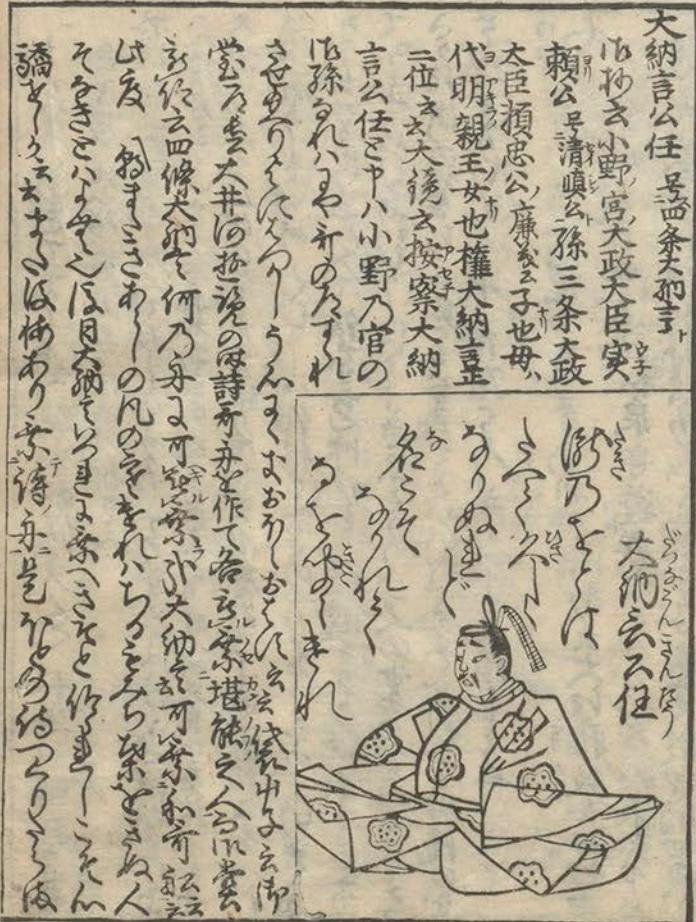
後考アレ

ゆくとゑ



まことうき文もとをはあひの他又より文そよづれへとよか
このあこみばすよりてこそるきて侍へるま儀同三司伊房
惣長瀬三年四月有夏また近大宰府尼宗物浦庸別卷同
三年四月有夏京号師門大臣儀同三司云云愚案轄原松雲
内大臣伊周帰京之後寛弘二年列朝參大臣下大納言上五年
准大臣賜封内子戸自称儀同三司ト云云後同三司三名と
儀同三司云云之伊房云よりそありてこうべを代りば号後
ふすりぬあ云從一位の麿名後同三司と六名別なり
朝古今多三中園白道登がるひうめゆりなるはこすくべ昨夜
ゆかてあさてうめゆりもうすばしとらぎりてもぞやきりま
え高車ハ太くうききそのさればくあふ車とらのむすくみ成
氣のかさりとちずれようとしてうんむえ氣きうすくとくはわ云く
くらう祭つてひとえほりとくれくやまきうきの内侍

同前



一久名ハアモテヤアミミ族古御瀬オモイ
和泉胡麻於キア
金玉物其の水火人奇化ホの機を乞
於送難上大覺寺ゆく事もすよりアリモアリムシ
足作り多ニ大足也於夢也通鑑も西より暖城天皇水を所云々今
大足のアサヒとほれの後もヒヨウ作り也御瀬アモアシ
は御瀬アモアシハジケハ御瀬アモアシモアシモアシモアシ
をアリタマメアシヒテ後アモアシ作役トモアシヒテ後アモアシモアシ
アモアシナレトモアシヒテアモアシナレトモアシヒテアモアシナレトモアシ
アモアシナレトモアシヒテアモアシナレトモアシヒテアモアシナレトモアシ
アモアシナレトモアシヒテ首尾アモアシヒテアモアシヒテアモアシヒテアモアシ

口年
和泉式部 上東門院女房号弁門侍
守保衡女 昌子内親王乳母 和泉守道貞妻
号モ小式ア内侍ドサマリミク儀式ナヌミ室於ア向西家
三ノセ



大羽アモアシア赤は何勝
奇後アモアシア答ア非ス
備アハアシモアシアモアシ
アモアシアモアシアモアシア
前ねもモアシアモアシア
日記云泉玉アハ莫乃え
アラカヨアシアモアシア
アモアシアモアシアモアシア
モアシアモアシアモアシア
モアシアモアシアモアシア
モアシアモアシアモアシア
雅致アモアシア
又モアカ輝世 水をも次ハモトガモアシア
モアシアモアシアモアシア

ほ松き夜三よをられいきとゆきまくは人のもとにはうけ
れまことわらんとはきなんと云うり同源のせのがこひ本せ
きり跡後うへかては記すもむたうのきなん本せずとの
ありひゆふくへ友わよりよとくねあそそやうなむと
えんそこめてえれあすきとあらへとえ泊源切のくらぶ
んとけくを

同年 紫式部 号名未アト上系門院女房
源氏物語作者
勸修寺え詮良マサニス中
納マサキチ兼輔マツシキ院孫前ち
省時マサヒメの芝母シモト持ほ音タケニ高
乃女マダム在傍マサニの依宣孝マサヒコは嫁
みて大威タケル三位ミツとせりはあ
お云マサハシ妻マサハシひ宏後マサヒコ方



三ノ八

從位倫子左大臣雅信安の官女マダム也とお跡て上東門院みはまは美衣
ミ号マサヒメ也が儀出子マサヒコ也アニ三後ミタテ也ハ源氏物語の中による空
の本と演う甚源母シモトの御マダムのみをゆきりニ母マタタクハ一東院の乳母マミの子
多く上東門院マサヒコもよししきとそわゆりの主マサヒコをもととすマサヒコ也と
さうのなまの匂マサヒコぬもじきアヘマサヒコ也と云うめ黄式アドヌ
えをぬ出マサヒコ也あくそと菫マサヒコのむのゆきりにばまの字マサヒコもあくあらを
六マサヒコのあわせ行法マサヒコおあ

おを今難上はやくうちわマサヒコもおをひうりゆきもろのうへで
りあへりうけのにてせ力ナ自マサヒコう月マサヒコよこひしてからゆりを
れへ云マサヒコはまくの月マサヒコのううりやすそばうくうりてゆりし
御マサヒコううりにてゆづわひそうこううはんの御マサヒコううりをあら
ひくかと見てあひらぐふわいはまめうりゆひてだらもそれ
くあやうかりひわみるよほくと見うりすうば月マサヒコのやく

わらふかうへてとよな字先くちきこといようあをいの
乃めりあふまことじうとうきてそくわうなとほうゆりた
お云えくのゆいきうもくらあくまくあうだしあくもあれ
ハクークムヤハハ妙あるよおア可妙うり

六畜十年余

大貞三位 号琴房 河海

内大臣 高藤 苗

商格中納言 恩 慣ノ孫

右衛門 佐宣孝女母ハ

紫式アニ云大貞成平章

妻とすうひて号琴房

三位作玄教小ハ大貞

国韻ノ妻云能利玄教

一条院ノ乳母作玄教

三九



大貞三位

ありわらの山

風うけ人

そぞく人を

よもれ

やむきう

はくへる氣母云々殊未作急に速民教氣にてせよあひさ
きされ絶多せしる
板松生一玄三うれくすむかとのねいはくきなとひひう
きうえとひうえ あがはうきとハギとのこくうわく
うきてううて三位頭ううひてわきとやうへきつんあ
ひうれどひひすと 仰わ云有もひ松名號皆を接は承
のみううひてうよとひ延承くのまのうよと云う
いひをうほよ泡ひてふじとあもうよと 以て我とくもう
めうをあうひす上六うよといそそうの序 うんひてよ
人と云れやひうとハうく身男のかうておがはうきとくと
ゆを悟てゆふと速キうこくううよとおもく物とぞと
こあうてりうんあり

七百年前

赤城邊上所門心女房榮花物候作玄以物云先孝天皇孫

亦後五位上平篤行少孫

卷之六

蕭盛子作者部類之大和守赤條時用子突

卷之三

平魚盛カニ袋カニ

赤浪アラマウカ右衛門ウエモン尉志ウエシ亦号イホ赤

嫁，衛門，寔，兼盛，女也。

言之行之得失之

子之由深於時用子云以奇仙也但赤涂鷹

又高陽院有今之時多
無名妙姿

日記本
支那の風土記

三ノ十



御子はくきうを讀み方の事に付、おもちきねども、
えらかうりふをうそせありうのうれしうれしうれしうれ
うれしうれしうれしうれしうれしうれしうれしうれしうれ

於此意二中の國而わね外作をうとまくもううふものひ
ひりゆりりりきのひてこきりあはくかくせんきりからひてほる
きのひてこりたるひよてこひ契約まで不本の假想のこ成りや子云
中園日後見先女忌給後彼女奉意園白日暮卷上南面簾詠居然
同直衣人奇來香甚女有悅心會食其後夜々來但曉々馬車音
以長繕著封着直衣袖朝此繕留南庭樹上其後無來直是懸之
所歎然又懷妊臨期產胞夜開見之多有血無他物云見赤は記
りてとべれ縫そりといれものとどくあらまやくもいねじりてと
きとすらやうの事とは將くらうくあらとすれあてき
とゆくがひあくタ一あらんひとくらうくゆくゆくゆくゆく
とあくとやくとおまくはんじとくらうくゆくゆくゆくゆく

さかみとなめすをうとうへひじりうかくまくみかね
乃トヒミシテモアシキのきよてわれぬあふうれんをす
だいして月をとぞやうひかくらぬみまゆ やりてぬ
ゑ物久の場よいさう月とゆつをほく ねまね

六百十一年余

小式部内侍 東門院房

山城云稿 謂兄十一世孫稿

仲遠孫和泉守道貞之

作者不知ハ陸奥守云

三条園自教道の子の子

あじちし翁子は於送

あり及通乃オ源内の方府

お家云々ひびくに松

よりうだり家密勅云小



三士

秀の内侍お泉式アク一ふすてかうりすくせよもくわてス
野く道のとくとくきのわくとさうゆをめく
令奈雜上お泉式ア保昌ようて母ほのふよゆきうがおみあ合
のありそむに小式ア内侍すくにうれてるまうと申ゆて定れ高
内くよまうておとおとせきをりの母ほハ人ほはタんや
ひくまうてこひやんこひりとくわくわくとんをとけれ
て立きばはくめとよめうえくはお云お泉式アたくまよわくまく
お泉保昌せはくすくとくかくうて下りとしきくとくとく
とくき人の命ア入れるとくいきせきをのよとけわ云是小亨
ク奇のよきハ母の本泉式アみよまで我りすよするこえ幸のゆ
治ゆきひりにありくらひもは定れでくじととき後方の山
音よぬどぐねてのうくひとせきをれきとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

作説大室ハ母は娘の入にきぬのう(ヨアヤウ)トホ古今ア
大口が子ノ月乃りケテモ母田の面ヨモヨシタ令と後ヨリモ^モモ
ハ母はの奥ニ大にひまやくとけくハ母は娘のとこをいんもと
皆母は居主(のち主)の端もととてゆくてもみねどものる
ももありゆきのほりと云ふより内すり仰に意ハ母ねへる(つら)
タクヤレハまつてシテヤと云ふあつてみねハ大にひまやく作説
とをきはあれハまつてシテヤと云ふあつてみねハ大にひまやく作説
ケル所ハき事ハ國裏のちとせ移や是うれとて元ぬヲを
人ぬとは失かうや本筋のうやし代丸本筋をアラシヒ
あらわ(キル)をと渡りまつたむすとわのねきと云ゆくさ
のゆうひをきと取らうべ

大口余
伊勢太輔 上東門院書房
伊勢太中臣能宣孫祭玉浦親^{サチコス}伊勢太中臣能宣孫祭玉浦親^{サチコス}
御毛衣集第一卷の内因うのハ字^{ハシタ}さく^{サク}人のもと^{モト}まろ^{マロ}もろ



あよゆれ、其をと歎
てすよ先と作とありざれど
え袋中子^ミ伊勢太輔上東
院中宮とア因初て奈浦親
ひとも^ミ言よひうと心や
キテ^ミ守のう八^ハを極或
人^{ヒト}を^ハは當^{ハシタ}はあよ^{ハシタ}の
事件のゆの枝と大浦もと
えき^ハはげては祝^{ハシタ}る
極^{ハシタ}もと毛^{ハシタ}にく^{ハシタ}く^{ハシタ}に人^{ハシタ}と目^{ハシタ}とつけ^{ハシタ}く^{ハシタ}ヤとてア
ふよ^{ハシタ}りあて死^{ハシタ}りせて妻^{ハシタ}死^{ハシタ}て葬^{ハシタ}よ^{ハシタ}き^{ハシタ}そ^{ハシタ}う^{ハシタ}て^{ハシタ}は
欲^{ハシタ}宮中放^{ハシタ}か^{ハシタ}云又^{ハシタ}は人オ^{ハシタ}の前^{ハシタ}と^{ハシタ}て^{ハシタ}草^{ハシタ}木^{ハシタ}のよ^{ハシタ}く
るみえ^{ハシタ}色^{ハシタ}花^{ハシタ}屋^{ハシタ}の^{ハシタ}あ^{ハシタ}き^{ハシタ}の^{ハシタ}花^{ハシタ}木^{ハシタ}の^{ハシタ}一^{ハシタ}卷^{ハシタ}の^{ハシタ}詞^{ハシタ}一^{ハシタ}卷^{ハシタ}の^{ハシタ}

はあとありあ況あくべー

奈良都へえ明天守より先にまそせ代のれうりやきれされは家
人のとえりきんば治あまをきのあらやみをかわらへるよどみ裏
の居方へて三笠山よりあらもろそくひかまうとも八重橋とまてぎ
ぬれまといづやあきこゑとおきた寄物の旅衆にさうのまへて
せのまをと平生の様をとのぞ
そぞ

清少納言

日記 用其性字喜慶安樂
清少納言 桃を帝作たけ
清原深春父曾孫元輔よし
也条院皇后宮定子よし
忠白道隆の女房也愚案よし
宋衣物宿よし也三條院
の女房の歎影舍定子妹よし

色とうやうそ
李がく
緋くほ
也
閨も
ゆうり



ふまはくぎ 中はくきは室子長保に年有又くれをかよ
坂のゆきへりわきのなみは山に山のむらかわらわれくあ
けよと誓言候すの孫起アヘの寺ヨト清がゆ出家して
帝のりそり尼びかうやうていきはせとときてみやう
まみのともありそく
は松送耕三太祖をひ賄物さりかうて侍きるよ門のまのひみ
されをそいそきえりて使ふあてきのまえよよされととそあこ
きて侍をまほあらまえりのまえ御室の園のことをくことひ
あけきうとまくられをあらの園よ侍とあまへくめくま
きのまえほされてとだり候よ人取つてみゆと侍りうき
御室の園へとくらやとけくわき孟嘗君とよしと奉事ようくま
きり和ようくれをのれし外に西宮の宮殿のうきくまには
人をとくとくと賞えうみのまねゆみのまねとよくま
あわとくわのまねをうれしのをもとさうり候てねよ

又よ圓と明てとゆりとえ史記列傳五義乗かとくよきのまよ
かよまれてすりあひへ流らるるものもゆきとへわかつまわ
あねりとほうめのせうことひは色故の圓とほめ歎をせし
ほうめで御名の圓とすとひてつうすりとひへかよこふはや
とえあへきすそとひとくめ歎のせうごうおぢやすより
おわえくろこにへぬくろんこすみ吸の圓とゆきとへこへ
ゆゆきとよたほひよと云御ハ助主と御名圓と
達塔ととげした首の内と後からくとよみゆき
意ハ作法取除きよ仰のきりをみせりよとひあふせハ御名の
とくにゆりとひとひを破り歎の取除くゆりとんあきと
やうくらばまさかはされとて名のあくと信されてとゆのく
波方と波さきのゆうをもくれてひをゆしとんとひとくびと
お橋まで　かねん人かやどき圓されひきせかうねとあき
てまわとう

三ノ面



船頭たま道雅 童名松君
三位中井栄花物語
師門な良修圓云子母
大西源重光女天姫
三年七月平スヌ_ク袋中子
云道雅三位八師内在
夏の息也八条の山莊
のぼる文殊強み元人よ
よきとめぞ撥ひて是
とくとひり仰ふるがお詫詫承詰御松林あゆりあゆ
ほ松邊玄三伴勢の舟ありとひおりのかりて倚り冬ぐ
あひしてうよひをうる哉おやきむきこくめとてまより
めをとづけさせりてゆひとひよ守りみづればよみぬを
ふふ　愚案ば密遊の事業花物語玉打手柔木錦四葉の

李と妻は安宮三条院守一定女常子の親玉とす
 みをあふ事かとすりしめひわひくわんゆ御法音
 はあまひきとされとばんじきとくさんと云ふとくに人
 がうそ並みやうにとある之氣源ききせり一紫中子云
 う心めうみゆう事めあうきあくまおもとのゆ遜雅
 三位ハイとす仰もさうもとろにゆえ密通のうれすは多秀
 級や所御。 おほへ事あとまうおひ。 おひけの園すわ
 まう今もとらかひとくとく。 みけのとくの
 携されうるおなじぬまくはまとくひ。 おおむちやうて
 まううのまくに押ぐてもわろはや。 流やは人よあ
 さはうるんうとうかの歎ううき。 あかはきまうか
 星志在中詞歌かう謂毛下男

六章年余
 権中納言定頬 正三位守安舟大納言公任二男母昭平親

三ノ主

李と妻は安宮三条院守一定女常子の親玉とす
 みをあふ事かとすりしめひわひくわんゆ御法音
 はあまひきとされとばんじきとくさんと云ふとくに人
 がうそ並みやうにとある之氣源ききせり一紫中子云
 う心めうみゆう事めあうきあくまおもとのゆ遜雅
 三位ハイとす仰もさうもとろにゆえ密通のうれすは多秀
 級や所御。 おほへ事あとまうおひ。 おひけの園すわ
 まう今もとらかひとくとく。 みけのとくの
 携されうるおなじぬまくはまとくひ。 おおむちやうて
 まううのまくに押ぐてもわろはや。 流やは人よあ
 さはうるんうとうかの歎ううき。 あかはきまうか
 星志在中詞歌かう謂毛下男



六百平年 事記 侍従 直於と集筆

相模

作者於教え原 鶴光女
入道一宮女房榮子由子云

大江公資爲妻云 賀美爲
相模守依_ノ号相模一

本名し侍従云、笠木云

美父蓬之守謙_{キヨシ}言子く
兵八段太輔_{ハハチ}行一位四

ズムノリハ於きを聚す我木の船より相模と信州にて
參すと是もより小野家の者たる所の事_ト よく翁_ト 明子
翁子云ニテ傳の事_ト は相模御とも云ふ。まことに清
きやうの感_ト もくろりゆとひもあくこうあり。ほら
よみからくの句_ト 疎中_ト 訓勅_ト 二部_ト かえ
ハ赤は左集_ト はきよア相模上古_ト 也くすむ

あ_ト なれ
あ_ト らはり
あ_ト まくとも

あ_ト お_ト
あ_ト ちくわく



又久々事_ト 公激凌女侍_ト あめみだり_ト ひと相模_ト どくに
はね_ト 事_ト 信_ト 四承_ト 六年_ト 心裏_ト ひくに_ト いふよ_ト おも_ト あらす
んを_ト 八恩_ト ひそ_ト せん_ト 事_ト とくに_ト 三_ト 之_ト 善_ト まこと_ト く_ト 振_ト うくとくわいと_ト
えく_ト み_ト 文_ト 診_ト 神_ト まへ_ト さうに_ト おりりとてゆう_ト み_ト まく_ト く_ト り_ト てく
くま_ト うと_ト いづく_ト 氣_ト 流_ト 帝_ト 使_ト 服_ト 面_ト ちく_ト 人_ト 仰_ト てうく
かと_ト お_ト うき_ト 神_ト やうく_ト ちあき_ト はまくちあがつき_ト くめくひうれ
神_ト とうだい_ト あらう_ト うとく_ト 起_ト そとく_ト とく_ト えん_ト 事_ト と
之_ト 景_ト 花_ト 物_ト 語_ト 六根_ト 令_ト 幸_ト えふ_ト あひ_ト ほ_ト わく_ト 事_ト の
五_ト 美_ト 京_ト 九_ト 乃_ト 修_ト 相_ト 择_ト うく_ト みわい_ト がむね_ト 神_ト まへ_ト あらう_ト お_ト
太_ト お_ト お_ト 将_ト お_ト 徒_ト 修_ト 朝_ト あくとゆく_ト 起_ト おゆく_ト 神_ト まへ_ト あらう_ト
ひの_ト け_ト は_ト う_ト は_ト に_ト は_ト は_ト に_ト は_ト は_ト は_ト は_ト は_ト は_ト
原_ト お_ト お_ト

平子也、三井寺、平等院、保

安院、住定善寺、座主、修驗

名徳人也、え譲世種物流云

平等院の傍邊に至りて三井

寺よりはせりべくふるき

説をもておはせりりしに

圓架をとひまわらう

大峯葛城はまく事かかて

をひ圓も山へきをそくかこうひあひて白河院名の院あり

き達持傳そかまうき、禁秘物多めむ山の内にひる傍正風範

御作定服御階膳欲云はれ云或詫白河院猶子云元亨尺

書子後朱雀院時簾景殿女御延子の妻子もかゆり

食祭難上大峯にくおりひつせむご稀のめくりんとおぞ傳名

おおえ大峯行方の火達の奉事と云てまひりとハ祭のとみとい

大僧正行寧



秋山火達の奉事といひ是火達の奉事も一あり、けぬ様と源の本の事
すめられどもする事アリ

市人火達のうちからてもりはる今我どもがりがた
あはれかじえて、よやまらむれも我よりかよちう人あへと云
心もれづれ、もろたまわれどりとへて、小象院の山源三井
寺の傍邊の圓もやまとひの山源三井寺よりひそく
かこなりゆれ、もろかほ揚ひてまひきとひのまみどりくさ
今尼復つゝあはれのままで、やうの山源三井寺より
かくまもすきとて、家長玄定來て、すみれいり、まも
あはれふあるまく、のむらねとねりうつ、これいあはれすのうと
足りりまく

音平余年スカウト号仲子、出羽は吟泉院女房、スカウト古物、スカウト一品式アヒ葛原親王七代、
國坊内侍、スカウト作者於教、亦白川院女房、スカウト孫安藝守重義孫周防守、スカウト繼仲女、スカウト太糸園内之作者部類云

周防守 棍仲女云 袋中子

周防守

元城川院乃中宮の御方又

喜のよ代

令渡給承元人永實を

ゆめりり

坐てふるもあら葉わ乃

うみれ

父捕とアてまれと候

あらみあらすりかひえ

因房の侍候をまわ

うひうく

小火捕をまつむるか

かくされ

御ハ城川院の女房族はがい候を放ねよとうりをひあは

因房の侍のわきに新のあらわなこ傷う寝ハ吹葉の源川

小と西との角きこ候世度あ次妻

かくされ

かくされ上きまつまきえうねのあらきを東二条院そくへあま

かありておうかくすけあらみ月房の内侍うやて候よかく

おひやうたふままで大風を忠寂これどよくみどそくひうとみを

三十八

のちまくまくして候りさればよし。二条院於芥子地二条南東院
院東道を公送ミ二条園白鷹領云え忠寂弔申初て後堂又後室坐
あえまくらるとは多かどもと云候をとの方の義五郎
おん公主の娘のうーうかあらこのまゆの名流よ西のとき久
きうじびひうきとこうひうとうひうと化入て乃れへまわく
うう)愚案中古乃あよきうの宿とらへてよそうかり治
とと作そくまくまくとくゆう故なせのあくき人のひゆ
あくらうてとはそくまくとくの仮寝とよとて学ぶる
べきあよくおぬうとうりほのわやかううのひ事ううふる
くやう絆の母のいぬむまきと御 小寺アラキのくみもえと
御の浮舟が大浦うよのまと云ひ内侍うかひきくさんとと
皆冠うゆてあをこゆぬの述仰ありうのうのうの此ふと
候うううううううううううううううううううううううう



卒代三条院諱居殿在

冷泉院芳二皇子母

贈皇大后超子東三

条入道兼家公女天延

四年正月三日降謳寛

和三年七月十六日東宮

今月元堅一歲寛弘八年六

月十三日受禪十六日同掌

廿月十六日即位長和五年正月十九日讓位四十二歲寛仁元年

二月廿九日出家法名金窟諱同五月九日崩四月二十六日

於寺雜上例アホクノメシテ位ヲスルシハアカニリ

キヨヒルのあくまできよ波ウ後アテニハセミハ帝ハ自

をかくせのアドク候の事ハク位モレセアリニテ本庵

院みうせをのて角をう後セマリニシテアリトムアリ

えふやまひより金撫丹とえ茶をやうりきとどもくらぐ
ひうべくめとさやじとヤキと倣、極サキナハ身代ハシマフす
えきよあくれてやまくはくひみのりて左方のあようう
かひやくろようちおなづくれおもとく免スルもとく
アラ善アラシタえ
ふすとあそとひのかよとひのんヒノンおはす
ハの遠アリり小は伝タリとすんと是ア失シテトアキコスル
食ヒテとかく人をせのくは禁中カニのないそくりをもくらめき見
とちアーバをとほ伝タリすすきはくめをいもむへばと
ありぬせだまんのんまんにくら翁オカルトくやれ金カネこころ
くらをすくひそひそとアラトドクは寝出子ハシマフの科カ井
三索ミソほりうちうりきう深ハシマフみ内ハシマフと修シテ心ハシマフさうとも
さあきせゆのあれを空ハシマフの手ハシマフつぶす方カタえ
も走ハシマフで百ハシマフも走ハシマフとあそくセアラハ分ハシマフの種ハシマフ物ハシマフ不可
用ハシマフ

三条院



能因法師俗水燈号吉增

傳因唐師

稿諸兄公未孫稿忠塗孫
肥後守元體子也

袋門寺山妙云松因

五ノ名突会ありしを乞

伊豆三宿にて司用

かうちあはせうこ

せあらそりすひ林さ

うれ林と従て氣とかきら

惠業天川の手金取集より
八箇月余トよりてほどの風よりりりかうるよ云月より三四
月もそぞれのゆきまきれをあくらむせてうらはういの
きふうをれをれきれをれは守候用事もてテ官よりて雨
いのれとすれまつてわやまうかく家集是よおれ
袋山子云かくハ首ざりて歸して松因院くも然とお作

當初肥は近きと云ひて内侍入等不於此松已半載車輪板井て車取入
ととのる入波東横西去可改有案付と志自放又遇えろ幸友
小主也と説いて但五枚物を松因云何物不可承かが松云
山深とありてはまうかくのうへきうへ風内面うちめひて御云
自此為仰えヌヌ松因方多めり每ま共盛又上扇て宿泊之資
立家東四院家と併家の南庭有梅樹ぬ號其花云
仲又ハ常云松高丈二キニれハ高丈二又云竹田塗
四行と云左陸奥下向の内向川の園すう日ハ既又裝束
とけくらひてひよ人向云何木の松うや答云右房致入
道の秋山にうれの園とよまれへろはせハいそ松因院よ
てハ西れ云殊獨のう松因院不ト高奥亦有御比奈
うれ翁居寺ト高奥筋又由門支立云二文不向之由あく於一
志安旅丈八十時記云又云加久和也帶刀節信ハ松寄共
ニ候て急往因五有感緒松因云恩宗のう出物又足てきわ

往りとて自懷中錦（にしき）小袋をえやす其半又鉈脅（はく）一筋あり
云是ハナ室室（むろむろ）より大柄の傍（わき）合と此の鉈脅也と云子時
萬信喜悅甚て又自懷中紙（かみ）よひかと方かす用（う）アシメかれる
乃雖（いざ）是井戸の誰（だれ）行（ゆ）若（わ）感歎（かんかん）矣後懷（ごい）並（なま）め
は於後狀下承義四年内裏の有人（ゆうじん）云々ハ作況苑（さくけんぐん）ニ
室の先（さき）から來（くわ）ハとてあがれを榮（さか）のちてされ奉（まつ）りて立消
の御（ご）とくある事（こと）とひそて流れあそばれ様（よう）せらる（せらる）が因
う移（う）る事（こと）ナシテかえりすか古今元の御（ご）川口川お弟（おとね）な
る御（ご）有備（うび）の三室のひア因而（いんわ）ナシヒシヒ因房（いんぼう）の京亂
而（が）の亂（らん）とをかひあくせて見ほへきありありと後（あと）をと幸（さい）
の移骨（いこつ）へ是はまとと上方の山に休（やす）る々々

音年余
良運法師 作者幼頼云父達詳（くわう）が実方家、童玉女白菊云
秋園別當（べつとう）及於此ア大原母（おやこ）よりあらわし山子云人（ひと）大

三五九



原毛（はらげ）又起（おき）りよ微（び）等（とう）
然（ぜん）外（ほか）後（ご）お船（ふね）トウ俄（おとこ）よ下（おち）る
人（ひと）をそ向（むか）き等（とう）不（ふ）可（か）食（く）
運（うん）自（じ）房（ぼう）くそう不（ふ）下（おち）る
今（いま）或（もろ）欲（ほ）て告（こく）以（い）下（あ）の事（こと）
件（じ）の良運（りょううん）房（ぼう）千（せん）在（あつ）と云
或（もろ）僧詣（そうけい）云障子（さうじ）よ良運（りょううん）
去勢（いのし）の事（こと）情（じょう） 山里（さんり）の

ひ（ひ）あらぶ聞（き）こと（こと）もすこて初（はじ）もさくらい亦（よ）在（あつ）は松（まつ）雲
便（びん）去朴（いり）四基（よんき）良運（りょううん）房（ぼう）と對（たい）て云（い）よくと云相（あわせ）やあつて良運
や（や）かのれよくよくして何（なん）四基（よんき）云碑（ひ）事（こと）こねうへまわしてどう云
事（こと）あうれよ云誤（ご）り云良運（りょううん）暫（とき）案（あん）て又云（い）いわゆるのねり
お前（まへ）族（ぞく）のあふきの森（もり）よくよみてと仰（あお）げどこもやう
りととあやまるととく因基（いんき）口（くち）ニ

ほるまき秋上手ひきを云ふ由物云はせまつりおのせうる
えすそ御文よりの作とくもんハ作法ソノモおのれ秋
のメルキシカ者を三あく御ノビホ御きみをもつておら
くちたう秋の夕景と云ふ甚く乃の感情を察ア及スルトコトナシモ
ほに迷秀寺十首の内と定家の所が如よをもき多モ
出さず。は黒のモ比ゆ。と
むけく分身へはまと云ひ

六百三十年
大御言經信 号桂大納言 大系高
敦実親王曾孫中納言源道
方子後頼之父也母源國盛
女作者於敦云大宰師
中子云經信(ハ四余大納言
ス不第人也云々ハ雲南初云)



経信もうあを極めよ而ひありまんやうめひうを諱とあて
かひきりしこと下よ是とぞうと定むう人をり向河原家
松邊家へりおり經信ははまきかりく通後生とひきま
岱の不審之又云中ううりあるべひ道よほう人合ひくわ
経信ちくハ和のう地を学びてうのやうハ別の事にあひて而
きうじてあくともかきまとだにとだしけらば道の筋を
いがからうよほの世人あくもさりうて定平懐かしくあつた
事あらぬてよく被ゆすよきの名奉云あら古今著文云少
院太井源遊(源)の因三行承うのう物をもう師氏(シヨウシ)は經信は多うにま
まうかとそろまれてあづやうう三事(ねううそそく)をほひさま
ほきてやうれのあきとむをせひといれ方あり空よどりてゆく
うちかどれねうみ延年(ひきとよとし)とそまて後経のあよまで物方

と就ちて秋ノ三事よりは是の
金紫集秋而賢能トの極はのふ里アノ人よりて西が紫と云
ひを薄うるゝ夕されハトハ御立夕されよおりて、さく内に清きを
あり夕々のあつきも薄く夕々あれどあるこまゝれをとある
きふき夕暮れとひきうるゝ若狭そぞろくまう金こむべ
其門田の緑茶より夕の秋山よくと次とこれハ文也アリやう
て芳の金よきとけれ、ろき源紀はすよどに有聲志後
秋山をうけられらり可矣吟

六百年余

祐子内親王及朱雀院第四
皇女母中宮嬪子敦康親王女也才門官守れ考后殿の女
乃まられハ家トテアキタリテ金紫集秋川院號ニ
今ゆハニシ紀侯トあり紀侯葛原親王ちハ代孫範王孫
後天佐下傳方女

ミヲサニ



金紫集秋川院の正
時熟去入る薄う中納て後
お人立れぬ事のあらきの浦
川はほのよろくといふ
やきいはくす
萬葉歌合今宵モ度
上人ニシテ後ときこり
れぬまつりののとと
きさうのさよみてや
れと作られてまじ中納て後太ハ佐成の又
萬葉の奥ハ和泉重きりわき派ハ出わあく人と云ふと奇人を
うのハキシトシシトシ人されハやうの(又ハ契り)出
うのハシトシシトシ人されハやうの(又ハ契り)出
神とゆきえまればとある源と云う者や神のねきも

うれしき事ありてあまん云取りけらるゝつまく云あかせ
みかきとくもうれぎとくらうくさんすのうじを
おどりうめりきのこ

六百三余
格中納之匡房 号江師
成衡子也母楊孝親女正
三位大弟之大寧格師和
源方人世以次才兼之使
作士之也山也云過後
匡房賢居、うるを
ゆうれどうのたは向日
備よあに匡房坐まむ
ほね身云上うらのあかい
まうらきのあいそ全

三ノナ四

拉手御言匡房

さをさうへくおうもゆるて盤すよひの様とひまととさり
をよ先ゆく内のおひゆうひまひま三茶園白師道之也
さう初の度と事も家ゆきうかとほひのゆがふと奉文不初モ隊
ふとく汝子のさかひかひのとこハ筆のとどうわゆふよ
おこう云くらゆ云うち物とひあひるゆすふとまうて云うり
ものゆふとさくへんあよかとのゆくとくとすの
れうとさことひとくひと云ようくとくとすの
云來れひさはやんもわらうと

六百三
源後れ郭 金集撰志 大功と経伝で男母ササシタの女云く至ひだ
京を去後西行上華巒堪能之白河院の初とくけのちく
乙治之ゆふを潔ひと探りしら本能院をねお後れ
口得木連作へ定かで無く勤云ら身修外つてひと
云々を考證の師の立派をよめて詳説の後文云々

代す人をきよせり

又云後は後れより

換されねりそりま

ねりすまみのま

ばくとおちますな

きよたきのかくこ

とつみてるに跡の

ひづくとあは後ち

らす物をかわす

もすすりゆうを又ハ仰て令者のいわゆきれとくよ

を人後れとぞとてはせ一字ハさざれとくゆきりかんと

ヤキナカのくへもくきとるなの人をもみじれ

はあくまくともあ云後とええびほの被若ありて後

れすとあくあり給ハとのせよてやうりのかられど

源後物語

うりうり人と

もくせの

山もく

まげし

れも

いのぬね



三世

いすすも春後れよ及びて下すり肩とあくわさのす
一ちねのきくらとれんはまよまよまよまよまよまよま
す我意す二種生れて候が家よ意のす前の度候代をも因れ不^正道意
とくすとくらわ云初創り立意といひ事へ後者物よりよらが
黎生て後創の事す立意とくらわ松羽立あハ利とくく人の
心をもれでとけられといひうちやうれハうれどくも
きことひのねどとくえりは後とくわをめようた人のあひき
れひとけめつてもれつまくとくれられくよあくよあくよ
ま考か云はき公かくねぐままでまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

六百年末

藤原基後 後成郎守通之竹 濱川村丈良 精家 謙正 二庭右衛門を後後
み母院奥守源あらみ女也云大系畠云母下絶守る源水葉女也
從五位下左衛門佐守也直後成郎守通之金者と常よのひ

保延四年出家法名覺寧

後歲の本尊仰て二象

寂流の本尊の御うり御流

本尊の御拂明御相撲立

恵目拂拂多喜は枝お木地

タリ室あと作考きうちく

ハ云々各ひるをすきい縁を

れ玉後とすらるるものも

うも房のせのぞ一き深と御て常よりすきとこひねうり

は人のぞひてはくとされすくみへそをさせすひるひるゆ

んまへそはあ云委後と云物けの弊吉はくを後れよめしわざを

す我難守上傍於光毫維摩會の縁師の縁とひくまれよまれ

かの太政大臣ようじやさくとをゑんちう原とゆりきれよまれよ

れよまれよまれよまれよ

義原基後

ちけり
とき
させり
と
義原
基後

社りぬめり

あらまことの



うきりハ親ものもあらじは向むかひてあめ忠通云母のまほせひるをあ
を標原下野(を)

させたゞハ達のうこくあまつゆきせもあはれこくんばのゑ通云の於
キのあと契とすいへさせもうちあわのしきみされんと余にで
こやーちやーもうのうひもきえれで氣とくの林も済の
熱と氣の内れうつうとさうめあうくがよ松もじねれりと後あ
るくまなみえのよくすくよるるん体へあもみ氣深きうきる(

五言手年余

法性寺入道前關白大政大臣 忠通久法等ヨ三名傳
忠通久法等ヨ三名傳 治通久法等ヨ三名傳
代孫知足院奥自忠實父子也母從一位師子六条右大臣於房皇子
世保安二年三月五月關白詔即聽牛車同月戊辰長首同三年二月十七日
左大臣從位四等正月廿八日為攝政大治三年十月十七日任大政大臣同四年七
月朝政攝政為關白永治二年十二月七日又為攝政延祐天皇受
月久安六年三月九日又改攝政為關白康治三年八月土日上表每關白應

五言古

江三年六月八日於法性寺

別某出家法名門觀 法性
寺於大抄三九条河原身

信公建立續遺物語聲考

傳中々々のまそ云はゆく

はあ二重のうつ開ゆゆき

治りひたゞとおけ井りき

因西の君よ後成の帝佐よ

候をあらじあ政とよに

出立れぬうぢとて園やよどびにと唐門をせかすて
一院位と洗せのり一院又園向ようせあひりは四代の子との園や

モニ変換改とよにびとどくひふきのようと候をあらじ
あをもととてひきりをりしとありとくとけりきとをゆめゆめ
うをとくの道業とよてれてはるうたをとく法性寺の入道け



名をもつて家は源のあつるよりやうく又うゑるゆゑ源ありと稱せ
陸奥守あさくおもとまことすよりす入とお夕はおひとを差
後後れを云時の奇後と毎人の名退て刺せさをあさりぬきを
アラ奇勢く安守すよ。わのじよこさくへと後せきう
おおハルク時うれめくおさうおりとよ多ク水すきするあ
んどうくはくよ。

初元集雜下朝院經よからうゆ、因席上拂毛と云をば候せり。い
きうよめづく朝院を崇徳院うり。寺ふくきを皇室上のすみはま
めをこちくはよみてそく方角をもくわざわざ身よりてり。之のうの
えもあひて余情うきりか。社子移々去ゆねね所玉上どひの王敵
ウ林の若長太也とれわねおやうけ。身の字もそれと毎主施私乃
ふわれを仰志のを拂まへてお来うとみて私と公を多萬能よ委
給すひう内侍を薄れんや唐とあひく寝ぼく。破曉びこまく
めぐれひあふみゆ八十の拂よ御宿よ。

三三



丰恭帝 謹歿于在位十八年

崇徳院

謹歿于在位十八年

初元集雜下朝院經よからうゆ、因席上拂毛と云をば候せり。い
きうよめづく朝院を崇徳院うり。寺ふくきを皇室上のすみはま
めをこちくはよみてそく方角をもくわざわざ身よりてり。之のうの
えもあひて余情うきりか。社子移々去ゆねね所玉上どひの王敵
ウ林の若長太也とれわねおやうけ。身の字もそれと毎主施私乃
ふわれを仰志のを拂まへてお来うとみて私と公を多萬能よ委
給すひう内侍を薄れんや唐とあひく寝ぼく。破曉びこまく
めぐれひあふみゆ八十の拂よ御宿よ。

まようかことうくわらひ
もひまみはあんとのく

あそらほ

源兼昌

六百余年
源兼昌

あそらほ

源兼昌

宇多天皇苗裔歎
実親王六代降差護守後拂

あそらほ

源兼昌

子也從五位下皇后宮大庭云
堀院は百首の作者也

あそらほ

源兼昌

金葉冬初風流すもとつる
うが従うもとすもん翁あひ坐ての浦玉旅ねきを彼傍うり御のす地
てうとうひあつわうふくの浦より一束の旅ねき入あつみ園の
老翁のねさめはさこうとこばねづあねハとくねぬももみのくみをわ
ら可ねさあめんとうの字をうてアラベーと之を立あくもあ

五百辛辛矣

六条家、和奇ノ縦

藤原、奥名苦、商持は守、首、煙

三ノ廿九



孫六条修理太夫顯季三男
清浦重家承昭法師ホシ
各有家知家ホシ祖父あり
俊成子娘ハ旅情の夫子
メテ旅度ヒヤゼハル辞
とほよわくめて基後の
命とすうかり袋出子
云詞化集新院崇徳院
侍譲位之後故右京發
入撰みてまへ元年六月二日奉之云

朝方今秋上崇徳院より首の秋をうけた時にて云々ハ昨迄凡
みなひひきりまうりふうハ終一月のむす一のをくわらひ
きやう新のやうに明向うに凡情ありはあまとのふくゆよ
定めらきろとあらハあくよみやうてあらも面やうを

跡見学園女子大学短期大学部図書館



a 0010382257 a

鹿児島守之助著
元治元年

鹿児島守之助著
元治元年

三手

三手

29626

